平均台

『月刊いしい平均』増刊第9号
著者・発行者
かぶや亭坊楽

１５２

（小冊子『平均台』からの通しナンバー）

甲「回文て色々あるが、どれも上手に捻り出しているなあ」

乙「うん、全く。いざ自分で創作しようとなると、結構むずかしいもんだな」

甲「『文』にまで、ならないが、どっちから読んでも同じてえのを作ったから見てよ。先ず『力士が仕切り』、次に『パットで突破』」

乙「なるほど。お返しに一つ『運動会で食べたで烏賊うどん』、お粗末」

１５３

A「見られる　を　見れる、所謂『ら抜き言葉』が多く使われるのと同じように、『り』を『し』に置き換える言い方も随分多用されているねえ」

B「やっぱし。さっぱし。…」

A「それらは定着したのだろうが、『そのあたり』を『そのあたし』とは、抵抗があるね」

B「国語審議会を持ち出すまでもないが、表現も解釈も時代とともに変わるのが言葉なんだから、まあ時の流れに身を任せようじゃないの」

１５４

兄「此間、山陽・山陰方面に旅行してさ、岡山から島根へ向かったと思いねえ」

弟「バスツアーで『蒜山高原』なども通るルートだって？」

兄「そうさ。そこで謎々だ。その高原に着いたのは何時ごろかな」

弟「めっちゃ易しいね。『ひるぜん』だから昼前11時あたりだろ」

１５５

X「久し振りに『ヌード・ショウ』を観たよ」

Y「どうだった？　踊り子たち。一生懸命やってるだろ」

X「うん全く。健気で一途で、素晴らしいなあ」

Y「実に大したもんだ。これからは彼女らを『スト立派あ』と書こう」

１５６

先輩「チャールズ・ディケンズの『大いなる遺産』、読んだらどうだ」

後輩「是非とのお勧めなら一つトライしてもいいけど、コンコン狐が出て来るお話ですか？」

先輩「なぬ！　ディケンズの名作に狐だと。なんでそんな突飛な発想をしやあがる？」

後輩「だって『お稲荷さん』て言ったんでしょう」

１５７

娘「このお菓子、食べていーい？」

母「どの分かな。メーカーは何処だ？」

娘「メーカーだか何だか分んないけど、読めない漢字が並んでるよ」

母「どーれ、アハハハハ。こりゃメーカーじゃ無くて銘菓だわ」

１５８

「平均台」は、主に言葉遊びで、所謂「駄洒落」オンパレードと言ってもよいでしょう。ここで多少趣向を変えて、文字遊び、つまり文字の並べ替えの世界へ……

「スカイツリー」→「リース追加」、「先輩」→「盃洗」、「後輩」→「廃校」、「いじめる」→「めいじる」、「退学」→「楽隊」、「食堂」→「消毒」

全くの牽強付会で、面白くも可笑しくもないが多数ですが、中には連想が働き、ニヤリとするものもありますね。

１５９

監督「野球用語を並べたら、物騒なのが一杯あるね。刺殺、三重殺、死球…」

選手「そうすねえ。セーフ、アウトを生きたの死んだのと訳すから良くないんすよ」

監督「じゃあ新しいのを作ってみてよ」

選手「セーフは、まる、アウトは、ぺけ。死球は、痛球でどうですか」

監督「それじゃ第2次大戦時に使ったストライクは、良し、ボールは、駄目などと大差無いな。使用禁止用語にならないよう気を付けて、現状維持で我慢しよう」

１６０

爺さん「ここんところ異常気象とやらで、天気が随分変るなあ」

婆さん「そうね、小春日和から直ぐに気温の低〜い状態になったり」

爺さん「気象情報だからって上方にばかり行く訳じゃ無いけれど…」

婆さん「ええ、ええ。下方にも行きますよ。昇ったり降ったりして、丁度いい辺りに落ち着くわよ。果報は寝て待てでしょ」